七夕に思いを馳せて
日本舞踊と沖縄民謡体感イベントに参加しました

経営学部　国際経営学科３年　髙橋 英志

1演目のみながら、堂々たる舞でした。お忙しいながらもハイレベルな舞を披露してくださったのは、本当に貴重でした。山根先生、ありがとうございました！

7月7日、薫風漂うお昼休み。みなとみらいキャンパスのナレッジコアで、人文学会学生部会主催の「七夕と日本の伝統文化」日本舞踊と沖縄県民謡体感イベントが開催された。

このイベントは、日本文化理解促進を目的とされ、本学の国際日本学部教授である山根麻紀先生と、同じく本学院生の古里友香さん（琉球民謡登川流研究保存会）がそれぞれ実演してくださった。

演目としては山根先生が「松の緑」を、古里さんが「めでたい節」「安里屋ゆんた」「てぃんさぐぬ花」などの演目を実演してくださった。

山根先生が行った「松の緑」は、娘を松の若葉の初々しさに例え、将来は禿（かむろ）から太夫（たゆう）になるべき風格を備えるようにと詠み、娘の前途を祝った内容である。ゆっくりとした曲調の中に一つ一つの美しい振り付けがなされ、時間としては短かったが、その一つ一つが美しく涼しさすら感じた。

日本舞踊を踊ってくださった山根先生。人に見せるくらいではないですから…と初手で仰っていましたが、謙遜も謙遜。唄とのタイミングも完璧（収録されたものを使用）。たおやかに舞うのには見惚れました…

一方の古里さんは琉球の民謡を披露してくださった。立派な琉装姿に身を包んだ古里さんは、本格的な演目を披露し、特に「安里屋ゆんた」には筆者自身が強い思い入れがあった。古里さんは演目の前に、軽くこの曲について紹介してくださった。これは結い歌、仕事歌として知られており、

沖縄民謡を披露してくださった院生の古里さん。声の張り方から出立ちまで、本場そのものでした。

八重山諸島で歌われているそうだ。あとで調べたところ、唄では竹富島の美女・安里屋クヤマに惚れた役人のやり取りを面白おかしく描写しており、庶民が役人に逆らい求婚を跳ね除けたというクヤマの気丈さは、島の反骨精神の象徴とされているそうだ。（後の授業で竹富島を勉強する機会があり、このことを履修したのでとても学びを深くすることができた）

三曲目は「てぃんさぐぬ花」であった。これは親から子に伝えるいわば教訓歌として有名であると教えてくださった。また、「てぃんさぐ」とは「鳳仙花（ホウセンカ）」のことで、沖縄では昔、子供や女性が鳳仙花の赤い汁を爪に塗ってマニキュアのように爪を染める風習があった。この方法は良く染まり、色がとれにくいので鳳仙花で爪を染めることと同じように、親の教えは深く心に染めなさい、と言う背景もしっかりお示しくださった。

全ての沖縄民謡曲を通して筆者が思ったのは、普段耳にするテレビの楽曲や、家族旅行で訪れた彼の地で、実際に聞いたことのあるものばかりで、懐かしさと独特の音階に心惹かれることを再認識した。特に「てぃんさぐぬ花」の〆爪先に染みてぃの部分は最もお気に入りだと再認識した。

そして、最後には祝宴や祭りの終わりに急速なテンポの曲にのせておどる即興の「カチャーシー」（かき回しの意味）を一堂で踊った。筆者は気後れしなかったものの、やはり恥ずかしいと感じる方もいたからか、座して手振りした方が多かった。場がまぜこぜになって皆が踊り狂うのが本来の姿であるから、今後の機会で踊ることがあれば、目一杯踊ってやろうと心に誓った。

今回のイベントでは、日本舞踊と沖縄民謡を、古里さんや山根先生のような学生や教員による手で体感できた。ちなみに古里さんは大阪出身で、沖縄好きが高じて院までその研究を続けているそうである。筆者は、こうした形で、ペーパーだけでない血の通った研究の成果を、まざまざと見せられた気がして、胸が熱くなった。今後もこうした発表が定期的に行われれば、大学として素敵だと思い、これからも微力ながら尽力したいと感じた。

〆の「カチャーシー」の振りを観客に教える様子。古里さんは、生まれは本州でありながらも、沖縄の好きが乗じて大学でも研究をし続けているそう。まさに好きこそ物の上手なれ！